(1)　ボランティアの涙

施設長　　福田 雅文

私は競争社会、比較社会の中で育ち、利便性や効率性を優先し、物質的な豊かさに幸せを感じていたかもしれない。施設で暮らす利用者の方の多くは全介助で、それぞれに異なった重い障がいを持ちながら暮らされている。これまでの価値観は全く通用しない世界である。施設の中で重い障がいのある方に時間をかけて丁寧に向き合っていると、お互いの心が通い合う瞬間が増え、感動に似た喜びを感じることが多くなった。ボランティアに来られた学生さんたちの感想文を読むと、私の想像を遥かに超えた感動や出会いへの感謝の気持ちが書かれていた。重い障がいのある方は一生涯寝たきりで何も役に立たないと思われがちであるが、感想文から想像すると障がいのある方には特別な力があり、社会の中で大切な存在であることを教えられた。

2006 年 10 月 14 日、例年のように施設で秋祭りが開催された。今回は大勢の慰問があった。保育園からの子どもたちの慰問に加えて、長崎から総勢 80 人の龍踊会と女子高校生龍踊り部の慰問である。

この慰問を実現できたのは利用者からの手紙であった。「じやおどり ほんこ みたいです むつみに きてね」「じゃおどりみたい、いってんでペンをとりました。・・なまはみたことがありません。ぜひじゃおどりをみたいです」と書かれていた手紙が龍踊りのメンバーや女子学生の心を動かしたのだ。

あれだけの衣装と荷物を抱えて長崎から来ることは大変である。簡単に施設から頼めることではない。担当の先生が利用者からの手紙をコピーしてみんなで読んで、なんとか実現させようと話し合い、決定したとのことである。まるで夢のような話が現実になったのである。利用者の夢をかなえてくれたボランティアの皆様にこころから感謝したい。

踊りもよかった。成人男性の龍踊会の迫力はすごかった。そして、女子高生の龍踊りはさらに何か心に伝わるものがあった。何度もアンコールに応えてくれた。利用者は迫力ある踊りと爆竹、どら、龍の鳴き声などじゃばやしに興奮した。家族や職員もこんなに目の前でみるのは初めてであろう。長崎くんちでみんなが龍踊りのとりこになる理由が理解できた。やはり、テレビではこの迫力や感動は味わえない。

踊りが終わって、さらにすばらしい光景を見た。利用者の感謝の言葉に学生さんたちが涙を流されていた。ありがたい涙だ。担当の先生はこれが大切なことなんですと言われた。

私たちの施設には以前、高校生の学生さんたちが一週間程度ボランティアに来てくれていた。

その時のボランティア活動後の感想文を紹介したい。
『障害者の方に「ありがとう」とか「にっこり」と笑顔を浮かべられるのがとてもうれしかったです。人の役に立つ喜びをしりました。』『言い表せないほどの温かい気持ちや思いやりの心、また、難しさなどを頂きました。今、私の心は本当に温かいです。』『人のため、自分のために生きていきたいと思うことができました。利用者の方の笑顔を得る事に喜びの心を持つようになりました。』『一週間という短い時間だったけど、もう感謝感激雨あられでした。ここで働きたいと一生懸命思うぐらいで涙がポロリ、ポロリと滝のように溢れて、もう前が見えませんでした。』など、学生さんたちは重い障がいのある方から大切なメッセージを受け取られたように思う。重い障がいのある方が一生懸命に生きている姿に触れて、ボランティアのこころに感謝の気持ち、温かい感情、やさしさを目覚めさせてくれているようだ。

医学生の一日ボランティアの感想でも「よだれを垂らして奇声を発して、這いつくばって、そんな人ばかり。びっくりした。利用者のひげを剃ってあげた。おそるおそると。触れ合ってみるとなんてことはない。同じ人間だ。・・人それぞれ顔が違うように障害もその程度に感じてきた。

家族が利用者と接している光景は眩しかった。目をみて、微笑みかけている。愛に溢れている。・・我々の住む競争社会から考えるとここは異次元かもしれない。・・しかし、彼らの周りにはとても素敵な笑顔があり、私たちが忘れかけていたような純粋な気持ちを思い起こしてくれた。人を思う心、人をいたわる心をこの施設にきて学ばせてもらった。」と感謝の手紙を送ってくれた。きっとこの医学生は素敵な医師になってくれていると思う。

何故、若いボランティアの人たちは涙を流すのでしょうか。重い障がいのある方と触れ合うことで、人間のこころの奥に住んでいる純粋、無垢のやさしさが呼び起こされて、感動となって溢れ出てきた涙ではないかと思う。この触れ合いで涙を流した本人も周囲の人たちも純化され、癒されていくように感じる。

経済的な価値観が最優先され、物質的な豊かさに振り回されている現代社会にあって、この「ボランティアの涙」は人間が生きていくための「いのちの泉」のように思う。感謝。